

西昭夫先生の人と業績

奥田俊介

西昭夫先生は鹿児島県のご出身で、いわゆる薩摩隼人の末裔に当る。今でこそ先生は重厚な雰囲気漂わせる老紳士といったお姿だが、壮年期においては、ある人が「ライオン先生」と称するほど威風堂々としたご様子で、やや茶色がかった長めの髪を靡かせてキャンパス内を闊歩なさるお姿には、近づきたいほどの威圧感があった。その西先生も本年3月末日をもって定年退職され、34年に及ぶ在職期間にひとまずピリオドを打たれた。

私は西先生とは年齢も近く、また先生が千葉商大に赴任された当時のご住所がたまたま私の仮寓に近いということもあって、家族ぐるみ親しくさせていただいた。心理学と米文学といった具合に、互いの専門分野は異なるものの、私は先生の豪快さと繊細さを兼ね備えたお人柄に大いに心ひかれたものであった。その業績表を見ても分かる通り、文学作品を媒体としての心理学と創造性の問題について、先生は何度も学会報告をなさっているほど、文学へのご造詣も深い。先生と私は若い頃、よく文学論をたたかわせ、そのことから私は文学作品に対する新しい切り口を見出すことができた。先生は日本の作家の作品傾向と年齢的变化の相関性を研究しておられるが、その理論は少なくとも私の研究してきたヘミングウェイ、ビアスといった米国の作家にも正確に当てはまるものであると考えられる。これは先生の心理学研究がいかに幅広いものであるかを示す一例にすぎない。

もとより門外漢の私には、十数冊の著書をはじめとするおびただしい数の先生の研究業績を分析・評価する能力などある訳がない。青少年心理学、行動心理学、産業心理学、カウンセリング理論などに及ぶ先生の研究対象分野の幅広さにただただ驚くばかりである。ただし、先生は千葉商大での研究生活の後半においては、学

生相談室の整備・拡充に奔走されたせいもあってか、カウンセリング理論の完成に全精力を傾注されていたようである。その期の先生の研究論文のテーマがカウンセリング理論に集中しているからである。

先生はお若い頃、故郷、鹿児島にて6年間小学校で教鞭を執られ、その後上京して、心理学研究の道に進まれた。従って先生の心理学研究の原点は小学校での教職体験にあると私は考えている。幼年期教育の重要性を認識されたからこそ、より良き教育理論を達成すべく、先生は心理学を通して、人間の本質を追究されたのであろう。先生の実践的な調査や経験を重んずる研究態度の原流はまさにそこにあるのである。

そのご立派な研究業績は別にして、千葉商大における先生のご功績の中で、特筆大書すべきは、何んといっても、他大学に決してひけを取らない学生相談室を立ち上げられたことである。先生はセンター主任以外は、役職につくこともなく、この事に尽力されてきた。そして生涯一教授の立場を貫かれた。学内の地位に執着することなく、研究・教育に邁進する生涯一教授という生き方こそ理想の教師像であると考えられるが、かつてそうした生き方に徹した大先輩の中には、フランス語教授の故藤井春吉先生が、また最近では英米文学教授の芹川和之先生がおられる。このおふたりの先生はすぐれた学識を持ちながら、謙虚で誠実に、学者・教育者の道を歩まれてきた。芹川先生は今なおご健在であり、時折先生の警咳に接することが、私の大きな喜びのひとつである。西先生もまたこのご兩名と同じく、生涯一教授の道を長らく進んでこられたが、学生相談室充実への先生のご努力はもっと喧伝されてしかるべきではないだろうか。西先生のように30年以上も在職し、生涯一教授に徹しながら、大学の発展に並み並みならぬ貢献をしてこられた方を、私共はもっと厚く遇すべきだと、私は愚考する次第であるが、いかがなものであろうか。西先生は定年退職後も、相談室へと、また講義のためにとご出校なさっておられるが、最近では、いつも居心地悪そうに、研究館談話室にて、独り静かに坐って居られる。先生は飛ぶ鳥、跡を濁さずとばかり、律儀にも定年前に研究室を撤収されたが、もし研究室に空室があれば、定年後も講義を続けられる先生方には、引き続いての研究室の使用を認めてもよいのではないだろうか。

学外では、西先生は都道府県主催のカウンセラー養成講座等の講師として引っ張

り風の状態である。これは先生のカウンセリング理論がいかに学界等で高く評価されているかを証明するものである。先生のおかげで、本学への評価も大いに高められてきたと言えるであろう。学内にあっては、先生は吹奏楽部の育成に情熱を傾けてこられた。同部はこれまでコンクール等で数々の賞を獲得してきているが、これにも先生のご指導が大きく関与しているのである。

若い頃の先生は、斗酒なお辞せずの酒豪であった。共に大学の将来に危機感を抱いた先生と私は、理想の大学像を求めて話し合いつつ、深更まで酒を酌み交すことが以前はよくあったが、先生は健康を重んじられてか、最近禁酒に近い状態である。去る3月、私は数人の仲間と共に、先生を囲むささやかな宴を催したが、その時も先生は2、3度酒盃を重ねられたにすぎなかった。先生は、優しくてお美しい奥様の内助の功を受けられ、利発な3人のお嬢様達の励ましを一身に浴びながら、千葉商大教授の職を全うしてこられた。しかしなかなか悠々自適の心境にはなれそうもない。学内外では、先生のお力を必要とする声はまだまだ高いからである。

西先生におかれましては、どうぞご健康に十分に留意されつつ、益々ご活躍下さるよう、心よりお願い申し上げます次第である。